

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2 ミュージアムの収蔵品 49
バッジ

巻頭
つれづれ

3 埋め尽くす、困ったクセ
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学国際関係学部教授〕

館長だより

5 ロボットと人間の心
立命館大学国際平和ミュージアム館長
高杉 巴彦

ミニ企画展

7 開催報告 (2010年10月～2011年1月)

ここが
見どころ

8 大学立の平和博物館を特色づける展示とは
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
小関 素明〔立命館大学文学部教授〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

9 マイケル・サンデル 著 鬼澤 忍 訳
『これからの「正義」の話をしよう』(早川書房 2010年刊)
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
角田 将士〔立命館大学産業社会学部准教授〕

事業報告

- 10
- 特別展「世界報道写真展2010」
 - 特別展「ピース☆コレクションー資料でつづる平和ミュージアムの軌跡」
 - 日本平和博物館会議ロゴ・マークが決まりました! / 新設展示コーナーの紹介
 - アジア太平洋・学長平和フォーラム～立命館大学国際平和ミュージアムの理念と活動を踏まえて～
 - 「戦争・対立の時代」から「平和・共生の時代」へ:「わだつみ像」生誕60年記念
 - 2010年長崎青少年ピースボランティアとの平和交流事業・NGOワークショップ開催
- 19
- チャレンジ体験受け入れ
 - 2009年度 資料・図書などの寄贈者一覧
 - 立命館附属校平和教育実践展示に関わって
 - 平和へのメッセージー常設展示見学者の感想ー
 - 2010年度入館者状況 (2010年4月～2011年1月)、編集後記
 - ミュージアムインフォメーション



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

バッジ



バッジ (No Nukes)
直径：2.5cm



バッジ (Give Peace A Chance)
直径：3.1cm

10 円玉程の大きさの円の中に、深い緑色で大きな樹と遠くの山へ続く道、そして “No Nukes” の文字が書かれています (写真左)。これは、1977 年にアメリカ、コネチカット州の DonnellyColt 社がデザインしたもので、現在も販売されている人気商品です。同社のウェブカタログでは、以下のような解説つきで紹介されています。

私たちが初めてデザインを手がけたバッジです…このデザインは核兵器と原発双方に反対する運動の国際的なシンボルになりました。シンプルなデザインが万人に受け入れられました。木が好きじゃない人なんているのでしょうか？俳優／大統領のレーガン以外に「一本見たら、もう十分」なんて言う人は…

1980 年代から 90 年代のアメリカの保守党政権に対する皮肉たっぷりのコメントです。“No Nukes”とは核禁止の意味で、販売価格は一つ 1.5 ドルです。

同社のウェブサイトによれば、DonnellyColt 社は 1975 年に西海岸のサンフランシスコから東海岸のコネチカットに移り住んだ Kate Donnelly と Clay Colt がはじめた家族経営の小さな会社です。車のバンパーに張るステッカーを作ったことをきっかけに、平和、社会正義、環境の保護、人権を促進する進歩的なグッズの制作、販売を始めました。

こうしたグッズやバッジは、活動家や団体が運動のスローガンやメッセージのついたものを購入して支持者や賛同者に配布や販売し、広く社会に訴えるとともに、資金を集めるために使われます。

バッジ (ボタンバッジ、ピンバッジ、缶バッジなどと呼ばれるもの) は、19 世紀末に発明されました。表面をつるつる、ぴかぴかしたプラスチックのような素材：セルロイドで覆うことで、それまでのエナメルバッジよりも安価に作れるようになり、宣伝やお土産用グッズとして普及しました。ビクトリア女王の在位 60 年記念のお土産や、アメリカの大統領選挙のキャンペーングッズとして、また第一次世界大戦中には、戦費調達や兵士の支援のために販売されました。バッジは、内容の政治性に関わらず、メッセージの普及と資金集めの手段となっています。

戦費調達にも活用されていたバッジですが、1960 年代から 80 年代には、権力に抵抗を示すおしゃれな方法として広く普及しました。この中で最も象徴的なデザインは、いわゆるピースマークです。ユニコードでは「ピースマーク」と入力すると「☒」が出てきます。1960 年代に作られ、反戦平和運動の象徴として広く世界に浸透しました。デザインしたのはイギリス人のホルトム。周囲の○は世界を表し、その中に手旗信号の N (両腕を斜め 45 度で下したハの字のような腕の形) と D (右手を垂直に真上、左手を垂直に真下にした形) を組み合わせて表しています。N は Nuclear、D は Disarmament の頭文字で、世界中から核兵器を無くすことを求める核軍縮キャンペーンのために作られました。バッジ (Give Peace A Chance) では平和を試してみよう、平和にチャンスをとという文字がピースマークを囲んでおり、背後には虹も描かれています。

(学芸員 兼清順子)

埋め尽くす、困ったクセ

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学国際関係学部教授)

■ ユトリ口展を見る

美術館「えき」KYOTOで「モーリス・ユトリ口展」を見ました。ユトリ口（1883～1955）の母スュザンヌ・ヴァラドン、ドガやルノアールのモデルを務め、自らも画家として評価を得た美しい人でした。ユトリ口はヴァラドンが18歳のとき私生児として生まれましたが、母は恋や絵に忙しく、幼いユトリ口は祖母のもとで孤独な時を過ごしたようです。13歳のころから飲酒癖があり、20歳代はほとんどアルコール依存症の治療で入退院を繰り返しながら、モンマルトルの風景を描き続けました。絵を描き始めたのも、アルコール依存症の治療のためだったといわれています。

画面手前から斜め奥に、まるで「遠近座標軸」のように道が描かれ、その両側にホテルや商店やアパートや街路樹が描かれています。多くの場合、画家の関心は建物を中心とする空間構成と、いろいろな明度の渋い色彩のアンサンブルで、人物はアイデンティティのない構成要素のようです。「ユトリ口色」ともいえるアイボリーやクリーム・イエローを基調として、ボルドー、ネーブルス・イエロー、マンダリン・オレンジ、エメラルド・グリーン、ブラックなどの色の調和で描かれたモンマルトルの風景は、鑑賞者の心を掻き乱すこともなく、多くのファンにも心地よいようです。私には、なかなか「それ以上」ではないのですが…。

ところで、奇妙なことに、私はユトリ口の絵からまったく違った要素を感じ取っていました。ユトリ口の絵では、画面下方の「道」と上方の「空」に挟まれた空間を、決まりきったように、遠近法によって配置された建物が隙間なく埋めています。この「空間の枠組みを隙間なく埋める」という感じが、なんとなく私自身と重なって見えたのです。

しかし、その後「棟方志功板画展」を見て、「なんとまあこのアーティストは煩いぐらい賑やかに画面を埋め尽くさない気がすまない人なのか。志功に比べればユトリ口はおとなしいものだ」と改めて感じ、そのことに触発されて、私自身がもつある困った性癖について自省することになりました。

■ 時空を隙間なく埋めるクセ

私には、時間や空間を埋め尽くさない気がすまな

いという「悪癖」があります。何も描かない「空白の味わい」とでもいうものを楽しむ日本画は大好きだし、しっとりとした雰囲気を感じてゆったりと物静かに語る人にもとても魅力を感じるのですが、私自身はといえば、講演は早口な上、90分話し続けても私の声が3秒以上途切れることはないという有様で、時に「弾丸トーク」とか「マシンガン・トーク」と表現されることもありますし、「江戸弁安斎節トーク・ショウ」などと揶揄されることもあります。実際、本人も講演中に「酸欠」に陥りそうになり、あわてて話すスピードを遅くしたりすることもありますし、講演直後には何分かつ息をする状態になることも珍しくありません。

講演や講義の資料を作ればギュウギュウ詰めに情報を盛り込もうとするし、最後に少しでも余白が出来るかわれば、行間の調整や新たな原稿を挿入して本文をその分だけ長くしたり、「今日は何の日？」情報を囲み記事風に仕立てて、とにかく余白を埋め尽くそうとするのです。私の授業の資料には、ほとんど余白というものがありません。

手紙を書けば紙面全体を文字や絵で埋めないと気がすまないし、次ページの写真のように家の壁面やトイレの空間でさえ賑々しくいろいろな「展示物」で埋め尽くそうとします。

時の過ごし方も、ポケーツと何もしないで何となく時間をやり過ごすというのが苦手で、いつも何かやっていないと気がすまないようなところがあります。旅に出て列車に乗ったとたん、「えーと、目的地に着くまでの時間は何をするんだっけ？」と自問し、やるべきことが決まっていなくて、一面では得した気分を味わったりしますが、その反面、なぜこの時間帯の有効利用を考えなかったのかと自省したりします。まったく困った性分ですね。

どうして「早口弾丸トーク」や「余白なし資料づくり」に陥るのかというと、一つは「サービス精神」かもしれない。厄介なテーマでも話の中になるべく冗談を入れ込もうとしたり、その時々聞き手の興味・関心に合った面白い話題を盛り込もうとしたりするのですが、一種の「エンタテイナー精神」なのですね。東京・深川の下町で育った私は、小学校時代からラジオで落語を聞いてイメージの世界に遊ぶよう

な一風変わった子どもでしたが、「言いたいこと、話したいことを相手構わず一方的にしゃべり倒す」というのとは違って、せっかく話すのだから相手に理解してもらいたい、それも、できればスッと心に入るような仕方で楽しみながら分かってもらいたいという気分がとても強いのです。

第2は、「もったいない意識」かもしれません。時間や空間に余白があると「もったいない」と感じるのですね。どうせ空いているのなら、そこに情報を盛り込めるのではないかと。あたら利用可能な余白があるのなら、それを使わない手はない。「もったいない意識」には、「使えるものは使い切る」という面と、「余計なことののために資源やエネルギーをムダに使わない」という面があるでしょうが、私の場合は前者の傾向が強いですね。余白を放っておかず、徹底的に埋め尽くす。そうすることによって「心に決まりがつく」のです。本人は「やるべきことをやった」というちょっとした達成感を感じるのですが、聞き手・読み手には迷惑かもしれません。

第3には、とくに講演や講義の場合には、「足りないよりは、あり余るほど準備しておく」という気分、つまり、話すことがなくなって時間を持て余すという事態を避けるために、過剰に準備しておいて時間が足りなくなったら話を省略する方がまだマシという気持があるようです。それは「立ち往生」や「絶句」を恐れる「臆病さ」に通じているのかもしれません。

困ったことに、当人はそういう厄介な性格をそう嫌ってはいないのです。どんなテーマを与えられようと、所与の時間いっぱいキッチリと話し切り、しかも楽しませたいという気分が、私を過剰なほどの準備に駆り立て、結果として成長させてきたのかもしれないと感じるからですね。

■ ユトリある展示の心がけ

しかし、空間や時間をギッシリと埋め尽くすという態度は、博物館のあり方を考える場合には危険性を孕みます。ゆとりのない詰め込み型の展示をしてみせて「どうだ、参ったか」と言わんがばかりの独善的な姿勢に陥りかねません。ゆとりのある空間構成で、参観者がそれぞれのペースで考える機会を保障するような展示にならず、自分の考えを次から次へと矢継ぎ早に押しつけ、「分かったか！」というような独りよがりな展示になる恐れがあります。

立命館大学の国際平和ミュージアムは、2012年に開設20周年を迎えます。現在のミュージアムの常設展示は、どちらかという「ギッシリ埋め尽くし型」の面がありますが、「見て、感じて、考えて」というミュージアムのモットーを実践するには、もっとゆとりのある展示のあり方が必要であると私は感じています。

ユトリロの絵を見ながら「ユトリのある展示を」などとダジャレのような思いに囚われる私は、やはり変わり者かもしれません。ユトリロの絵は全体の構図が決まりきっていて、棟方志功の板画のような強烈な訴求力や意外性に欠ける分だけ、鑑賞者には安心感があるでしょう。しかし、平和の問題では、参観者に意外な事実を突きつけたり、違った見方を提起したりしてあえて心に引っかかりを起こし、問題の本質に迫る契機を作り出すことも時には重要なことです。「埋め尽くし型、押しつけ型」ではなく、ゆとりある展示を基調としながら、単に「見る」だけではなく、「感じて、考える」場となるようなミュージアムのあり方を、館内外の人々の経験や知恵をお教え頂きながらさらに追求していきたいと考えています。



玄関を入ると“Anzai Mask Museum”で
東西南北の壁面はぎっしり



トイレも「お坊さんのお習字大会」など開催中

ロボットと人間の心

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 高杉 巴彦

■「カレル・チャペック展」でのロボット展示

立命館大学国際平和ミュージアムでは、2010年6～7月の春季特別展に、生誕120周年にあたるチェコの作家カレル・チャペックを取りあげて、科学技術と人間の関係や人類が直面する課題への「文明批評」を行った、彼の多彩な活動を紹介しました。チャペックは戯曲『R.U.R.(Rossum's Universal Robots)』の中で人造人間が人間に反逆する未来社会を描き、「ロボット」という彼の新造語が世界に広まりました。

特別展に関連して、「ロボットの科学と技術」と題して、立命館大学理工学部ロボティクス学科の川村貞夫教授による講演会を開催しました。ロボットの歴史や御自身の研究「両腕搭載水中ロボット」の実験をはじめ、最先端のロボット事例の解説とともに戦争用ロボットの危険性が話されました。

現代では、人間にやさしくて有用な各種のロボットが研究・製作され、将来は医療、福祉、教育、輸送、警備、癒しなど様々な分野で役に立ち、人間の安全と平和に寄与することが期待されています。

■ロボット三原則

『国際平和ミュージアムだより』のVol.18 no.2 (2010年12月10日)に、本学情報理工学部の吉川恒夫教授が「ロボット三原則」について、現在のロボット工学やロボットの「こころ」に触れて書かれています。重複するところがありますが、紹介しましょう。チャペックが『R.U.R.』を書いた1920年に、アイザック・アシモフは生まれました。彼の著名な作品集に『われはロボット (I, ROBOT)』というのがあり、その中に人の心が読めるロボットが登場する「うそつき!」という作品があります。

アシモフは作家であるだけでなく、天文学をはじめとする自然科学の解説書も書いている学者でもありました。彼はロボットに関する大きな貢献をしています。Roboticsという言葉は彼の造語ですが、ロボット工学と訳され、立命館大学をはじめ多くの大学でロボティクス学科があるくらいです。彼が造った「ロボット工学の三原則」は、今でも様々に議論されています。

その三原則とは、【第一条】ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過すること

によって、人間に危害を及ぼしてはならない。【第二条】ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りではない。【第三条】ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのない限り、自己を守らなければならない。

■ロボットの心

さてその「うそつき!」の中に登場する人間の心が読めるロボットRB34号通称ハービーの話です。ロボット製作会社の研究所所長とその後継を希望している数学者、またロボット心理学者のスーザン・キャルビン博士と彼女が好意を持っている若い技術主任のからみがシチュエーションです。研究課題の解決方法をめぐって所長と対立している数学者は、どちらの考えが正しいかをロボット・ハービーに問います、そのときハービーは数学者の肩を持ち、所長が引退を決意し後継者としてすでにその数学者を当局に推薦していると応えます。またキャルビン博士に対しては、技術主任が先日連れてきた美人だが知識や教養のありそうもない女性は彼の従妹であって、彼は実はキャルビン博士のことを愛しているのだと、ハービーは告げるのです。しかし後日、ロボット・ハービーの言ったことは事実と反しており、所長は引退を決意してなどおらず、技術主任は例の教養の無さそうな女性と結婚することが判明します。数学者やキャルビン博士は激しいショックを受けるのです。

ロボット三原則の第一条があるのに、なぜこうなったのでしょうか。相手の心が読めるロボットは、直面する相手に真実を告げることで相手の心が傷つくことを避けようとして、結果的に嘘をついてしまったのです。しかし実際は真実でない解答にだまされた人間は、かえって傷つくことになります。ハービーにキャルビン博士はこういいます。「あなたは真実を告げることは出来ない。なぜならそれを教えれば人は傷つくから。けれどあなたが人に教えないと、かえって人を傷つけることになる。だから教えないでなければならない。けれど教えれば傷つくから教えてはならない。ただ教えないと傷つける。」と追い詰めていきます。ロボット・ハービーは「お助けしようと思った。あなたが望んでいたことをいったのです。そうしなければならなか

った。でも傷つけてしまった。」追い詰められて思考停止となったロボットは、ついに警笛を鳴らし動かぬ金属の山と化してしまいました。キャルビン博士の口から出た言葉は「うそつき！」でした。

■人間とロボット

人はロボットとは異なり、融通をきかせることができます。広い視野で決まりや約束とは違う行動をとることができます。すべての条件や指示が無くても、生育過程で身体を動かし社会生活する中で学んだ「常識」によって判断し、思考停止にはならないのです。赤ちゃんでもかえって自分にとって必要なことに関わりないことかを判断しています。また「嘘も方便」と、嘘をつくほうがベターだと判断もできます。指示されたことやインプットされた情報の範囲でしか行動できないロボットに、どう自分で判断して行動させるかがいわゆる「フレーム問題」なのかもしれませんが、極めて困難なことです。しかし、ロボットが条件明示しなければ動かないことを笑ってはおられない事態があります。

1月30日に東京ドームシティで起きたコースターでの転落事故について、マスメディアは会社側の安全確保責任を中心に、マニュアルに「安全確認」とはあるが「安全バーを手で押して確認」とは書かれていない事などを報道しました。2004年頃までは手押し確認をしていたが、「客からの苦情で、目視に切り替えた」などの話も伝わっています。安全バーのロック無しには発車できないシステムなど、会社側に万全の安全体制をとる責任があることは明確です。

しかし、この事件が提起するものは、人間であるからつい安全確認の徹底を怠る可能性があるので、ロボットのように条件を明示するマニュアルの徹底が必要という面や、人間であるなら、マニュアルがあろうが無かろうが、人間の命の重要性を認識するという原点の「常識」を発揮すべきであったという両面を示しています。つまり「フレーム問題」は、今やロボットのみならず人間の問題になっているのです。

■人間としての自立

1950年に作家レイ・ブラッドベリーが書いたSF小説『火星年代記』の中に、火星人が登場します。彼らは都市を建設し運河を持ち芸術を持っていましたが、入植した地球人が持ち込んだ水疱瘡によってほとんど全滅し、わずかに残った者は山奥に隠れ住んでいるという状態でした。やがて地球人が大量に火星に移住し、植民地都市生活が展開します。

そこへある火星人が登場します。火星人はテレパシー能力で地球人の心が読めることで、相手に気に入られる人物になりきることができ、他者から愛され認め

られようとしていました。一方、ずっと以前に地球で14歳の息子無くし、その痛手を忘れて静かに余生を過ごそうと火星にやってきた老夫婦が暮らしていました。そこに現れた火星人は、老夫婦が望むような息子トムになって触れ合い、その家に同居するようになります。老夫婦は不審に思い、話に聞いていた火星人もかもしれないと感じながらも、愛するトムと全く変わらないので、しばらくは楽しい団欒の暮らしが続きます。何日か経って、郊外の家からしばらく振りに街に出かけた夫婦は、しづむトムを連れて行きます。トムは「僕のそばを離れないでね。」と頼みますが、老夫婦は街で映画を見ようとしているとき、人ごみの中でトムを見失ってしまいます。ところがトムを探しているうちに、今度は別の夫婦がかつて海で行方不明になった娘を見つけたという話が老夫婦に伝わってきます。またある警察官がかつて取り逃がした犯人を見つけたといって走っています。街の雑踏の中でやっとトムを見つけた老夫婦は呼びかけ、その愛の強さにいったんはトムの姿になった火星人は一心に老夫婦のもとに駆け寄りまゝ。あと少しでたどり着くというときに、彼を見つけた声がかかります。「私の娘よ」「いや息子だ」「犯人逃げるな」「いや私の夫だ」などなど。トムはその度に人々の心に合わせて姿を変えていきます。人々の強い心と、叫び声やひしめき、泣き声、訴えの中で、火星人はついに激しく震え、呼吸が荒くなり、最後の悲鳴をあげて倒れました。そして死んでしまいました。

この火星人は、ロボット・ハービイーに近いのでしょうか。それとも心優しく壊れやすい現代の人間に近いのでしょうか。暖かい人間関係を求める気持ちも大切ですが、自己成長する人間にとって重要なことは、「枠組み」を他から指示されるのではない自分自身の確立です。優しさとともに自分の人間としての「常識」を豊かに磨くことなのでしょう。



「夏休み親子企画2010」に来館してくれたムラタセイサク君®、ムラタセイコちゃん®と一緒に

開催報告 (2010年10月～2011年1月)

第60回

「第4回立命館附属校 平和教育実践展示」

2010年10月17日(日)～12月23日(木)

毎年秋・冬季に実施している、立命館附属校の平和教育実践展示は2007年度より開始し、今年で第4回目を迎えました。初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。2010年度は下記の日程で開催しました。

【日程と展示内容】

①立命館中学・高等学校

会 期：10月17日(日)～10月29日(金)

テーマ：「立命館中高における平和教育実践」

内 容：中学・高校生によるベトナム・カンボジアの海外研修の成果と、その研修を活かして授業内で取り組んだ課題作品を展示。



立命館中学・高等学校展示の様子

②立命館小学校

会 期：10月31日(日)～11月5日(金)

テーマ：「立命館小学校における平和教育実践」

内 容：立命館アジア太平洋大学の学生を迎えて全校で取り組んだワールドウィーク（国際理解教育）、3年生の「戦争中のようす」をまとめた新聞、ポスター、5年生は広島宿泊学習での様子を写真にて紹介。

③立命館宇治中学・高等学校

会 期：11月7日(日)～11月19日(金)

テーマ：「戦争と平和を伝えるとは？」

内 容：戦争体験者への聞き取り調査から中学生が学んだことの紹介と、高校3年生は反貧困ポスターと、研修旅行先で行った「平和意識調査」結果をポスターとして展示。

今号では2010年10月から2011年1月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。



宇治中学・高等学校展示の様子

④立命館守山中学・高等学校

会 期：11月21日(日)～12月3日(金)

テーマ：「立命館守山中高の平和学習について」

内 容：中学2年生が総合学習で平和学習に取り組んだものをレポートで発表。高校3年生は、国際貢献がどうあるべきかパワーポイント資料で報告。広島平和研修を取材したVTRの上映、文化祭企画「アジアに井戸を建設しよう」という取り組みについても紹介。

⑤立命館慶祥中学・高等学校

会 期：12月5日(日)～12月23日(木)

テーマ：「北の立命発 生徒が考える世界の平和」

内 容：中学生は「“平和のものさし”を使って考えたタワー」と名づけられた美術作品展示、高校生は広島・長崎での平和実践の中で作り上げた「平和宣言」や「“平和のものさし”を使って見た海外での研修旅行」について紹介。

第61回

「廃棄された公文書からみた徴兵の実態 —大正年間友禅図案裏打ち文書の発見—」

2011年1月12日(水)～1月30日(日)

京都にも馴染みの深い友禅。その図案の裏打ち紙の中には、数多くの公文書も含まれていました。その中には、今となっては希少な郡役所、陸軍省関係の兵事資料も含まれていました。今回はそれらの一部を展示しました。こうした資料は、徴兵に関わる役割を示すとともに、「徴兵猶予願」の件数から徴兵忌避の実態が窺えるなど、大正時代の徴兵制を考える上で、重要な意味を持っています。

主 催：文部科学省グローバルCOE「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)
京都文化研究班 木立研究室

大学立の平和博物館を特色づける展示とは

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 小 関 素 明

(立命館大学文学部教授)

世界には戦争・平和関連博物館は、数え方にもよりますが、150以上あると言われています。その中で、大学立の平和博物館は当館だけです。これは来館者その他に当館の特色を説明する際に、つねに触れていることです。

では大学立の平和博物館としての展示はどうあるべきなのでしょう。これは中々難しい問題で、簡単に答えは出せませんが、私はその特色の一つに、高等教育機関においても行われた戦争協力姿勢にも目をそらさないことだと考えています。

しばしば言われるように、初等・中等教育と比べた場合、高等教育の場においては、表面的な協力姿勢とは裏腹に、戦争への盲信の度合いは少なかったことは事実です。思想・信条の自由が制約されていた戦前とは言え、高等教育機関で学ぶ学生の中には、われわれが思う以上に、戦争への懐疑を拭いきれなかった学生が多くいたようです。

ただ、そうではあっても、高等教育機関の周辺にも戦争ムードを盛り上げる環境が存在したことからは目をそらすべきではありません。年配の方ならご存じの通り、戦前の立命館大学は、むしろそうした環境を作り上げていた大学の一つと言っていいでしょう。地階常設展示の「国民総動員」のコーナーの中に「立命館と一五年戦争」と銘打った一角が設けられていることには自校が戦時体制に関与したことから目をそらすべきではないという反省が込められています。

「立命館と一五年戦争」で目を引くのが立命館禁衛隊と言う一般の来館者の皆さんにとっては聞き慣れない団体の存在でしょう。関連資料として「天賜 立命館禁衛隊」と記された「禁衛隊旗」のほか『立命館禁衛隊宝典』(1940年 立命館出版部)、「禁衛隊記事」(金・銀各1個)、黒表紙の「禁衛隊手帳」などが展示されています。

では、立命館禁衛隊とは何でしょうか。簡単に言えば、1928年に昭和天皇即位の大礼が京都で挙

行に期間中の御所警護の奉仕をするという目的を掲げ、学生を組織して作り上げた団体です。当時の学園が御所に近接していた(河原町広小路)関係もあり、学園の創始者である中川小十郎を初めとする当時の学園当局は、立命館の存在を社会にアピールする絶好の機会と捉え、大学部、予科、専門学部の学生・生徒1950名余りと、中学校の生徒約700名を編成しました。総司令部には田島錦治学長、参謀総長には中川小十郎館長が座り、その下に各教授のほか学生を中心として組織した銃隊、杖術隊、剣道隊、柔道隊、軍楽隊、自転車隊などの各隊を配置しました。まるで軍隊です。しかしこれが当時の世相に合致していたのか、新聞などには好意的に報道する傾向も見られました。

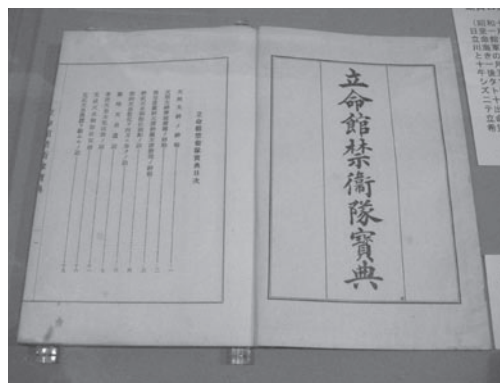
大礼期間中多くの寄付を集めるなど、かなりの社会的注目を浴びた禁衛隊の活動は、期間中の御所の警護だけでは終わりませんでした。まず第1に注目すべきは、結成翌年の1929年からは新入生全員が入学と同時に禁衛隊員に編入されることになったことでした。第2に、1930年代以降も、禁衛隊の中隊・小隊を単位とした行軍や天皇陵の参拝、軍事教練などが実施されていたことです。まさに時代の風潮に無警戒なまま流された「危険な社会連携」のなし崩し的な負の連鎖と言わ

べきでしょう。結成当初の禁衛隊を戦争推進団体と言い切るのは乱暴ですが、戦時色が強まる中で、戦勝ムードを盛り上げる大きな役割を果たしたことは否定できません。コーナー展示プレートの中に組み込まれた「南京陥落の祝賀行進をする立命館禁衛隊」の写真はその禁衛隊の役割を如実に示していると言えるでしょう。

大学立の平和博物館の使命は、こうした自校の戦争協力の歴史にも目をそらさないことにあると言えます。いささか手前味噌になりますが、こうした本館の試みが、他の高等教育機関にも波及することを願ってやみません。



禁衛隊旗



『立命館禁衛隊宝典』

『これからの「正義」の話をしよう いまを生き延びるための哲学』

マイケル・サンデル著（鬼澤 忍訳）（早川書房 2010年刊）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 角田 将 士

（立命館大学産業社会学部准教授）

これからの
「正義」の
話をしよう
いまを Justice
生き延びる
ための哲学
マイケル・サンデル 鬼澤忍＝訳
Michael J. Sandel 早川書房

本書は、著者であるマイケル・サンデル氏がハーバード大学で担当する超人気講義「Justice」をベースにまとめられたものであり、講義の様子がNHK教育テレビにおいて放送されたこともあって、わが国においても注目を浴び、ベストセラーとなりました。本書は『『正しい行い』とは何か？』

という哲学・倫理的な問題に対して、アリストテレス、ロック、カント、ベンサム、ロールズなどの古今の哲学者たちがどのように取り組んだのかを振り返りながら、それらを踏まえた上で著者自身の見解が提示されるという展開になっています。

本書が、難解な哲学・倫理的な問題をテーマとしながらも、一般の読者に対してここまでの人気を博している理由のひとつは、本書が、ある哲学・倫理的な問題を孕んだ具体的な問題場面に読者を直面させ、そこで読者に自分なりの判断を下すことを求める点にあります。例えば、本書では「あなたは路面電車の運転士で、時速60マイルで疾走している。前方を見ると、五人の作業員が工具を手に線路上に立っている。電車を止めようとするのだが、できない。ブレーキがきかないのだ。頭が真っ白になる。五人の作業員をはねれば、全員が死ぬとわかっているからだ。ふと、右側へとそれる待避線が目に入る。そこにも作業員がいる。だが、一人だけだ。路面電車を待避線に向ければ、一人の作業員は死ぬが、五人は助けられることに気づく。どうすべきだろうか？（本書、p.32）」といった鬼気迫る状況が提示されます。みなさんならこのような場面でどのような判断を下すでしょうか。読者は、このような状況に対して下した自らの判断と、正義や道徳に関する代表的な論において下される判断との異同から、自らの依って立っている考え方・価値観を浮き彫りにしていくことができるような仕掛けになっています。このように本書は「思考実験」の場を提供するものになっており、その意味で一般の読者にとっても有意義

であると考えられます。

本書がなぜ「正しさ＝正義」を問うのかといえば、それは現在の世界を覆っている諸課題の背後には、こうした哲学・倫理的問題が隠れていると考えているからです。例えば、わが国にとって、悩みの深い課題のひとつに「戦後補償」の問題がありますが、戦争中の加害行為に対する謝罪のあり方についてはこれまでも大きな論争となってきました。このような歴史上の不正に対する謝罪に反対する立場の人たちが「現存する世代は前の世代が犯した不正について謝罪する立場にないし、現実問題として謝罪できない（本書、p.274）」と主張することがありますが、このような主張を退けるのはとても難しい作業でしょう。先の主張に内包されているのは「われわれは自分がすることのみ責任を負い、他人の行為にも、自分の力の及ばない出来事にも責任はない」とする「合意」と「選択」に基づいた道徳観ですが、著者はこのような道徳観を「道徳的個人主義」として批判を加えていきます。著者は「人間はみずから選んでもない道徳的絆に縛られているという考え方を嫌悪するかもしれないし、信じないかもしれない。そのせいで、愛国心、連帯、共同責任などの要求をはねつけるようになるかもしれない…自由であるということは、自分を拘束する責務はすべて自分で決めるということ…私はこの自由の構想には欠陥があることを示そうとしている（本書、p.312）」と述べ、コミュニタリアン（共同体主義者）らしく「われわれは、選択とは無関係な理由で連帯や成員の責務を負うことがある（本書、p.311）」と主張しています。

著者の主張それ自体については、共同体、連帯といったものを過度に重視する主張へと結びつくものとして批判されることもあるかもしれませんが、しかし、価値観の多元化をひとつの特徴とする現代の民主社会においては、見解が分かれる道徳的なテーマは回避される傾向がある中で、本書は、それぞれの立場によって人が求める「正しさ」は違うということや、それぞれが重んじる価値の異同について深く考えてみることの知的面白さを教えてくれる好著であり、そのような知的探求のための入門的なガイドブックにもなっています。

世界報道写真展2010 - WORLD PRESS PHOTO 2010 -

～立命館大学衣笠キャンパス(KIC)会場～

会 期：2010年9月22日(水)～10月16日(土)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム(衣笠キャンパス)
中野記念ホール
参観者：7,974名

公開記念講演会

テーマ：「世界の紛争と貧困を撮る」
講 師：國森康弘氏(フォトジャーナリスト)
日 時：2010年10月5日(火) 14：40～16：10
会 場：立命館大学 衣笠キャンパス 以学館6号教室
聴講者：215名

～立命館大学 びわこ・くさつキャンパス(BKC)会場～

会 期：2010年11月10日(水)～11月23日(火)
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
エポックホール
参観者：2,579名

公開記念講演会

テーマ：「戦争は続いている
～イラクの戦後と沖縄基地問題～」

講 師：森住 卓氏(フォトジャーナリスト)
日 時：2010年11月16日(火) 10：40～12：10
会 場：立命館大学 びわこ・くさつキャンパス
コラーニングハウス I 304号教室
聴講者：252名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社
世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会
社団法人日本写真家協会
京都府、京都市、京都府教育委員会
京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局(衣笠キャンパス開催分)
KBS京都
滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会
草津市教育委員会、大津市教育委員会
NHK大津放送局(びわこ・くさつキャンパス開催分)、びわ湖放送株式会社
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社
ティエヌティエクスプレス株式会社



衣笠キャンパス展示会場の様子

～立命館アジア太平洋大学(APU)会場～

会 期：2010年10月19日(火)～11月7日(日)
会 場：立命館アジア太平洋大学 本部棟2階
コンベンションホール
参観者：2,329名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア
太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会
社団法人日本写真家協会
大分県、大分県教育委員会、別府市
別府市教育委員会、NHK大分放送局
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社
ティエヌティエクスプレス株式会社
別府商工会議所、社団法人別府青年会議所
協 力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約200点で構成した写真展で、今年度で53回目を迎えます。毎年4月から、オランダ・アムステルダムを皮切りに世界45カ国100都市を巡回する展覧会です。いま、この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。時に命がけで撮影された報道写真を周近で観賞することで、世界の現状を知り、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催いたしました。

今回のグランプリに選ばれたのは、イタリア人カメラマンのピエトロ・マストゥルツォが2009年6月、大統領選の不正への抗議が国中で高まるイランで撮影した1枚でした。日中の抗議デモでは収まらず、日没後に建物の屋上から抗議の叫びをあげる一人の女性をとらえたこの写真は、「何か巨大な物語が始まろうとしていることを表している。視覚的にも感情的にも強く訴えかける1枚」との高い評価を受けました。このほかアフガニスタンやガザといった紛争地の惨状をはじめ、スポーツ、ファッション、ポートレート、自然などを撮影した様々な分野の受賞作がならびました。

立命館大学国際平和ミュージアムでは、世界報道写真展を1995年より毎年開催しています。BKC、APUの各キャンパスではそれぞれ過去最高の入場者数を記録するなど、多くの方にご来場いただき、見る人に深い衝撃と感動を与えた写真展であったと思います。

また、公開記念講演会では、衣笠キャンパスに國森康弘氏（フォトジャーナリスト）をお招きし、今まで訪問された紛争地帯で貧困に苦しむ人々や住民の様子の写真の紹介

とともに講演を行っていただきました。BKCキャンパスには森住卓氏（フォトジャーナリスト）をお招きしました。森住氏は、まずはじめにイラクとはどのような土地なのかを説明され、そこでの戦争の概要をお話いただき、続いて劣化ウラン弾について語られました。両会場とも学生をはじめ地域の方にもご来場いただき、会場はスクリーンに映し出される現地での写真の力に圧倒され、終始緊張した空気に包まれていました。

世界報道写真展参観者の感想 衣笠キャンパス会場

- ショッキングな写真が多かった。写真には音はないが、周りの音や声がきこえてくるようであった。TVのニュースの映像以上に、心うたれるものがあった。血の流れることない世界を創りたいと思った。（京都府、20代、男性）
- 首だけが土から出た少女の写真を目にした時、泣きそうになり、目を離したい気持ちになったが、全く目を離すことがで

きなかった。どこか本物の人間より人形のように見えたのは、その子にもう命がないからだったのだろうか。報道という中に様々なカテゴリーが含まれるのは当然だが、なぜか戦争のイメージが強かった。しかし「報道＝現実を見せること」であると認識したような気がする。（本学学生、20代、女性）

世界報道写真展参観者の感想 びわこ・くさつキャンパス会場

- 自身の視野の狭さ、意識の低さ、そして感覚がマヒしていることを痛感した。今日、展示されていた写真におさめられているような事実を知っているにも関わらず、自分とは関係ないとして切り離して、目を背けてしまっていることに最も胸が痛んだ。（本学学生、20代、男性）
- 大変衝撃的な写真ばかりでした。審査員長の言葉にあるよう、私たちの今住んでい世界がいかに閉鎖的で日常にこり固まっ

ているか知りました。世界の、惨事、悲劇を知らずして、平和は語れないものだと思います。その意味で、この報道写真展の果たす役割は大きいのではないのでしょうか。来年も期待したいです。そして、来年再びこの展示会に訪れるときには、自分は世界にもっと目をひらき、成長した人物でありたいと思います。（本学学生、10代、女性）

世界報道写真展参観者の感想 立命館アジア太平洋大学会場

- 今回はじめて写真展に来場して、一番感じたことは自分の"無知さ"です。写真が語りかけてくる感情はなんとなくわかって、その背景にある情勢などがまるでわからなかった。日本という安全な国にいるからこそ、見て見ぬふりをしたことを恥じます。まずは、"知る"ことから始めようと思います。（大学院生、20代、女性）
- 普段は自分自身の目線ですが、世界を見ることはないで、

貴重な経験になりました。世界は広くて、今まで知らなかった、想像もつかない様なショッキングな写真が多かったです。ですがそれをみることにより、新たな世界に目を向けられるようになりました。私はまだまだ何も知らないし、世界ではこの写真展だけではおさまきらない、多くのことが起こっています。そんな世界に思いを馳せることを改めて考えさせてくれる写真展だったと思います。（高校生、10代、女性）

國森康弘氏講演会の感想

- 戦争はよくないものだという漠然とした考えしか今まで持っていなかった。今回の講演を聞き、写真を見て、急に大きな恐怖におそわれた。と同時に、戦争は終わったものだと思う、世界の状況に無関心だった自分が恥ずかしくなった。私が今知っていること（世界の状況）はほんのわずかで、実際伝えられていることというのは一部であることを分かった上で、

改めて世界の事情に目を向けていきたい。（本学学生、10代、女性）

- いろんな角度から、ものを見ることの大切さをとても感じました。世界を知ることによって日本を知ることが出来るし、身近な問題を見つめることで、世界の問題をバイアスなしに見られるという國森さんのメッセージがとても印象的でした。（本学学生、10代、女性）

森住卓氏講演会の感想

- やはり、写真というのは、説得力がある。劣化ウラン弾の被害は直視するのが怖ろしかった。本当に他人事ではない。（30代、男性）
- 一枚一枚の写真が大変衝撃的でした。私たちと同じぐらいか、それ以下の子供たちが劣化ウラン弾による癌や白血病で苦しみ、

泣き叫んでおり、生々しい悲劇が現実と同じ世界に存在していることを思い知らされました。イラクの現状はテレビや新聞でおおまかにしか知らなかったのですが、いかに世界と戦争を知らなかったか、知ろうとしなかったかに気が付き、悔しく思います。（本学学生、10代、女性）

ピース☆コレクション

—資料でつづる平和ミュージアムの軌跡—

会 期：2010年10月26日(火)～12月18日(土)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
参観者：15,478名
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会
京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、毎日新聞社
読売新聞大阪本社、京都新聞社
FM79.7京都三条ラジオカフェ



展示会場の様子



展示会場入口



公開記念講演会

「どう使う？平和ミュージアム」

日 時：2010年11月20日(土) 13:30～15:00
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階会議室
講 師：角田将士氏（立命館大学産業社会学部准教授）
高松智行氏（横浜国立大学附属鎌倉小学校美術教育教諭）
聴講者：37名



講演会の様子



講演会の様子
コーディネーター 左：高杉巴彦館長
講師 中央：角田将士氏 右：高松智行氏

2010年10月26日(火)から12月18日(土)の約一ヵ月半に渡り、2010年度特別展「ピース☆コレクション—資料でつづる平和ミュージアムの軌跡—」を開催しました。世界最初の平和博物館ができてから1世紀が経過した現在、世界には150以上の平和博物館が存在します。国際平和ミュージアムが収蔵する戦争と平和に関連する資料や、日々行っている活動内容を具体的に紹介した本展は、世界初の大学立の平和博物館としてスタートした当ミュージアム開館以来初の収蔵品展でもありました。

約4万点近い収蔵品の中から、一番大きい資料と小さい資料や、職員が選んだユニークな資料などを中心に、普段は常設展示さ

れることがない珍しい収蔵品を紹介しました。また、博物館で使用される道具や実際の作業工程など、普段は接することの無い「博物館の裏側」も見ていただき、どのようなモノが平和についての資料になるのか、資料の歴史をどう引き出すのかということと併せて、博物館活動と平和博物館独自の役割について、多くの方にとって頂く機会になったのではないかと思います。

また、現在、博物館と学校はどのように連携するかを問われています。11月20日(土)には、講演会「どう使う？平和ミュージアム」が開催されました。

この講演では、国際平和ミュージアムの高杉巴彦館長がコー

ディネーターを務め、講師として、社会科教育を研究している
本学産業社会学部准教授・角田将士先生と、戦没画学生慰霊美術館「無言館」の作品鑑賞を中心に学級運営を実践された横浜
国立大学附属鎌倉小学校教諭・高松智行先生にご報告をいただきました。

角田先生からは、社会科教育で博物館を使う場合、どのような力をつけるために博物館を使うか、その目的の設定が大切であることを踏まえたうえで、総力戦として行われた20世紀の戦争の本質をつかむための授業案を紹介していただきました。

高松先生からは、子どもたちが作品と向き合う時間をもち、交流することによって対話のできる学級をつくることをめざし、「無言館」や他の美術館で感じ取った体験を通して、変わって

いった様子を報告していただきました。

お二人の手法は異なりますが、ともに到達点には子どもたちに「戦争は悪い」と教えるのではなく、子どもたちが「なぜ戦争が悪いのか」をつかむことが挙げられており、今後、平和ミュージアムを学校の中でどのように使っていただくか考える上で、たくさんの手がかりが詰まった講演会でした。

これまでも、またこれからも、戦争の歴史や記憶を伝えることは平和博物館の役割ですが、「戦争についてどう教えるか」だけではなく、「戦争を通して何を教えるか」も大切な仕事であることを再認識させられる機会となりました。

現場からの視点と教育理論の展開に、聴講に訪れた37名の参加者は熱心に聞き入っていました。

特別展見学者の感想より

●戦争の悲劇を風化させないためにも、こうした取組（企画）は貴重と思います。子どもも一度来館したと言っていたが、また来させたいと思います。立命館大学に限らず、いま大学などで学ぶ多くの学生に、学問ができることがいかに幸せかを知ってほしい。（男性・50代・山口県）

●戦時中に書かれた日記や、手紙、遺書などが印象的だった。検閲などを気にしながら、家族や友人にあてた手紙をどのような思いで書いていたのか、受取った家族もどんな気持ちであったのか…。私の祖父も戦争で亡くなりました。しかし遺骨は発見されず、骨つぼは空の状態でした。やっと家に帰って来られた時には骨になり、骨も見つからないまま終戦を迎えた家族の想いが写真や遺品を見て伝わってきました。このような事が今も世界中で起こっていることは、とても悲しいことです。（女性・30代・京都市）

●ますます戦争についての記憶がうすれていく中で、このような展示は意義があると感じます。一人一人が、自分の頭で物事を深く考える事が大切だと強く思いました。情報に流されず、

自然の中で生かされている事を大切に思う事が大事だと考える教育が一番大切だ。（女性・60代・京都市）

●戦争のことを少ししか知らなかったけど、ここに展示されている写真や説明を見たら、現実的でリアルな写真もあって、戦争は本当にあったと分かりました。死体の山はマンガとかテレビのアニメでしか見たことがなくて、本物の写真を見たらすごくこわくなりました。（女性・小学生・兵庫県）

●戦時中にあったことや、ひさんさがよく分かってよかった。爆弾などを見て、本当に昔にこの爆弾が爆発したと思うすこし悲しい気分です。（男性・小学生・兵庫県）

●初めてカラーの幟を目の当たりにしました。出征時、こんなにも立派で勇壮な幟を作り、兵士を戦場に送り出していたのかと思うと、戦争がいかに当時絶対的な存在であったのかを感じました。またもう一度ゆっくり来たいと思いました。（女性・20代）

公開記念講演会の感想より

●高松先生のご発表の中には、角田先生が提起された「なぜ博物館を利用しなければならないか」の答がつまっており、感心いたしました。また、高松先生が児童の授業後の姿も追っておられる長いスパンで見る実践に感心いたしました。（40代・兵庫県）

●実践と理論の両面から博物館をどう使うのかが分かり自分の実践の参考になりました。（特に高松先生の子供の変容と鑑

賞のかかわり）（男性・30代・東京都）

●信念を持った指導者が児童・生徒に及ぼす影響力のすばらしさ（恐さ）を感じました。高松先生にめぐり会えた子供達は幸せだなあとうらやましい限りです。指導者によって未知の能力を持った子供達の養成を強く望んでいます。

（女性・40代・京都市）

日本平和博物館会議のロゴ・マークが決まりました！ ～平和のための活動の輪をひろげていきます～

日本は世界で一番「平和博物館」の多い国です。そのなかで立命館大学国際平和ミュージアムも加盟する比較的規模の大きい平和博物館10館が「日本平和博物館会議」を結成しています。この会議は、「戦争の惨禍を人々に伝え平和の実現に資することを目的とする博物館が協力して調査・研究等を行うことにより、相互の連携を図りつつ平和推進事業の一層の発展を期することを目的」として、1994年に結成されました。過去の戦争の被害や加害の問題に加えて、貧困や差別や環境問題など、能力の開花と平和の進展を妨げているさまざまな社会的暴力の克服のため、実物資料や写真、解説パネルを展示し、来館者に平和創造のための努力への参加を呼びかけています。

こうした「日本平和博物館会議」に参加する平和博物館の活動を広く知っていただき、各館への取り組みへの参観を呼びかけるために、「ロゴ・マーク」を作成することになり、当館が事務局としてその選考作業を担当しました。

このたび156点もの応募作品のなかから、厳正な審査の結果、東京都の高橋正広さんの作品が「最優秀」として選ばれました。

受賞作品のコンセプトについての作者説明は次の通りです。

世界の平和を希求する日本の平和博物館10館のミッションをシンボリックに表現したものです。「永久」平和を世界へアピールする協働と、そのたゆみない活動を「無限（∞）」記号を思わせるイメージにダイナミックに表象したもので、残念ながら未だに途上にある「平和

への状況」を中心部の不連続で示しています。しかし、それは決して空白ではなく、そこに希望の光を見出す意志の信念を表現したものです。

受賞作品は、日本平和博物館会議や加盟各館の活動を紹介するポスター・ちらしなどに活用され、広報活動に役立てられます。



日本平和博物館会議

ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

【日本平和博物館会議加盟館】（2011年2月現在）

沖縄県平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館
対馬丸記念館
長崎原爆資料館
広島平和記念資料館
ピースおおさか（大阪国際平和センター）
立命館大学国際平和ミュージアム
神奈川県立地球市民かながわプラザ
川崎市平和館
埼玉県平和資料館

◆新設展示コーナーの紹介◆

「暴力に抗し、平和を創る」 ～2階常設展示室に新たな展示コーナーができました～

2007年4月、非核・平和のために積極的に取り組んでいた伊藤一長・長崎市長が、一面識もない暴力団幹部に銃撃され、亡くなりました。当館は、遺族から弾痕が残るスーツや血染めのシャツなどの提供を受け、事件の重大な意味を伝えるコーナーをつくりました。このコーナーは、1987年の憲法記念日に、「赤報隊」を名乗る集団によって朝日新聞阪神支局が襲われ、小尻知博記者（本学法学部卒）が殺害された事件など、

言論封殺の危険な動きも紹介し、暴力に屈せず平和を創る大切さを訴えています。



展示の様子

立命館創始140年・学園創立110周年・APU開学10周年記念

アジア太平洋・学長平和フォーラム

～立命館大学国際平和ミュージアムの理念と活動を踏まえて～

立命館学園にとって節目の年である本年、立命館憲章の精神に基づき、「アジア太平洋・学長平和フォーラム」が開催され、会場を満席にして10カ国・地域、11大学の学長・大学代表が集いました。多くの学生、教職員、市民を含めて、延べ約500名の参加を得、熱気のある真摯な問題提起、討論、意見交換が行なわれました。

◆実施概要

日時：2010年12月11日(土) 10:00～18:30

会場：立命館大学 衣笠キャンパス
創思館カンファレンスルーム

参加大学：①アメリカン大学（アメリカ合衆国）②ハノイ工科大学（ベトナム社会主義共和国）③慶熙大学（大韓民国）④マコーリー大学（オーストラリア連邦）⑤国立台湾師範大学（台湾）⑥北京大学（中華人民共和国）⑦タマサート大学（タイ王国）⑧プリティシュ・コロンビア大学（カナダ）⑨インドネシア大学（インドネシア共和国）⑩立命館アジア太平洋大学（日本）⑪立命館大学（日本）

◆開催報告

第1部 学長フォーラム（10:00～12:40）

司会：小山昌久国際部部長（国際関係学部教授）
冒頭モンテ・カセム立命館副総長の挨拶に続き、山田啓二京都府知事の来賓挨拶、門川大作京都市長からのメッセージの紹介がありました。

基調講演が、明石康氏（元国連事務次長、本学客員教授）により行われた後、議長である川口清史立命館大学学長の問題提起「国際平和構築のために、大学は何ができるか？」を踏まえて、各大学学長・大学代表が、①平和研究の実践、②平和・開発・環境教育の実践、③国連や国際機関との連携による共同研究・教育プログラムの実践、④国際教育の展開などについて提言を行ないました。第1部「学長フォーラム」の締めくくりとして、川口議長のまとめがなされ、別掲の「アジア太平洋学長平和フォーラム共同声明」が発表されました。その第2項には、国際平和ミュージアムを次世代を担う人材育成に活かしていくことが言及されています。

第2部 パネルディスカッション

「アジア太平洋の平和と持続可能な発展」（14:00～17:40）

午後は、君島東彦国際関係学部教授がコーディネーターを務め、①アジア太平洋の安全保障問題（立命館アジア太平洋大学のゼミ生）②アジア太平洋における持続可能な発展（立命館大学経済学部・稲葉和夫ゼミの大学院生）③アジア太平洋における環境問題（地球温暖化）（立命館大学国際関係学部・大島堅一ゼミ）の学生・大学院生による報告が行われました。学長・大学代表のコメントを踏まえての積極的な質疑応答が、熱気あふれる盛り上がりを見せま



フォーラムの様子

した。また、立命館大学と立命館アジア太平洋大学の学生による平和活動の紹介があり、君島教授により全体のまとめが行われました。最後に是永駿立命館アジア太平洋大学学長による閉会の挨拶で、しめくられました。

第3部 交流・懇談会（17:40～18:30）

第2部終了後、各大学長とパネルディスカッション参加学生との交流・懇談が、会場を第1体育館1階に移して行われました。フォーラムに参加した学生の多くが、交流・懇談会にも参加し、熱気さめやらない様子で意見交換の続きが行われました。

アジア太平洋学長平和フォーラム共同声明

Asia Pacific University Presidents' Peace Forum Joint Communiqué

2010年12月11日 立命館大学において開催されたアジア太平洋学長平和フォーラムを受け、次のとおり共同声明を発表する。

1. 国際社会の「核兵器廃絶」に向けた取り組みに賛同し、教育・研究機関として「国際平和構築と持続可能な発展」に貢献する。
2. 立命館憲章の精神と理念、および国際平和ミュージアムの社会的、教育的意義を理解し、次世代を担う人材教育に活かしていく。
3. 異なる学問領域、学問と現実の垣根を越えた相互理解がより良い人類の未来社会の具現に不可欠であるという認識を共有し、知識と実践の連携を促進するよう努力する。
4. 本フォーラムに参加した大学との連携を基礎に、大学間で学生交流を活発化させ、異文化を理解し、国際的視野と知見を広げ、国際的な課題解決に取り組める「グローバル・シチズンシップを備えたリーダー」を養成する。
5. 国連を始めとする国際機関と連携し、「平和構築と持続可能な開発」のための研究活動や人材育成に積極的に参加する。

立命館創始140年・学園創立110周年記念 「わだつみ像」生誕60年記念：像と共に未来を守れ

戦後、立命館は「平和と民主主義」を教学理念として掲げ、戦前の痛苦の体験の反省に基づいて、学徒出陣によって徴兵され戦火に斃れた若人たちの苦悩を表した戦没学生記念像「わだつみ像」を、学園の平和のシンボルとして1953年にこの立命館大学に迎えました。1992年国際平和ミュージアムの開設とともに移された「わだつみ像」は、1950年に制作されてから2010年で60年を数え、像は「還暦」を迎えました。「わだつみ像」を、世代を越えた社会的記憶として伝え、平和を創造するために役立て、「私たち自身に何ができるか」を考え、実践する契機とするために、次の企画を実施しました。

■「わだつみ不戦の誓い 鼎談」

【会 場】立命館大学衣笠キャンパス 以学館2号教室
【日 時】2010年11月28日(日)14：00～16：00
【出 演】パネリスト 中村はるね氏 産婦人科医師
東 ちづる氏 女優
コーディネーター 安斎育郎氏
国際平和ミュージアム名誉館長

当日は10代から70歳以上の方まで、幅広い年齢層のお客様にお越しいただき、114人の参加がありました。なかには島根県からはるばる足をお運び頂いたお客様もおられました。アンケートからは多くの来場者が「大変満足」、「満足」と感じていただけており、大変意義のある企画とすることができました。開催の状況は以下の通りです。

始めに、戦争で命を落とした学生たちの手記『きけわだつみのこえ』を刊行し、わだつみ像の制作に携わった父・中村克郎氏の意志を継ぎ、「わだつみ平和文庫」の設立に尽力した中村はるねさんとボランティアの人々の奮闘を記録したドキュメンタリー映像「わだつみの声よ永遠に」(テレビ山梨制作、ダイジェスト版)を上映しました。

続く鼎談は、安斎名誉館長の司会で進められ、まず中村さんより、父の意志を受け継ぎ、10万冊の書籍と中村徳郎・克郎兄弟の資料を展示する「わだつみ平和文庫」を実現していくまでの厳しい道のりが語られ、実現に共に尽力された元山梨県立図書館長である小林是綱さんへの感謝の言葉が述べられました。

続いて東さんのボランティア活動を紹介する「世界ウルルン滞在記特別編 戦場で傷ついた子どもたち～ドイツ国際平和村の10年～」(ダイジェスト版)が上

映され、東さんが、「事実を伝える教育をしていくことが大事。勉強し、知り、想像し、自分の考えを自分の言葉で表現する事こそが必要。日本の若者たちにはまだ足りていない」と述べました。また東さんは「自分が自分らしく豊かな心で生きていく。そうしないと他人を大切にできない。そして、子どもたちが自分を大切にできる環境づくりを、大人たちがしていくことが平和につながるのでは」と熱く語りました。

お二人のお話を受け、安斎名誉館長は「日本には平和に関する博物館が多いが、教育に活かしきれていない。平和ではない地域の現実もふまえ、学生たちが『自分に何が出来るか』を考え、実践する力をつけられるような教育を目指したい」と述べました。

中村さんは「医者として、毎日患者と接する中で、話をして受け止めることの重要性を実感している。戦争の酷さ、平和の大切さを伝える資料の保存は難しい。でも、なんとか皆さんに協力して頂き、残りの人生を『戦争の廃絶』に懸けている父の思いを残していけたら」と締めくくりました。最後に立命館大学学生から、パネリストへの花束の贈呈があり、盛大な拍手の中、本企画は終了となりました。



学生による花束贈呈
東ちづるさん(右) 中村はるねさん(左から二人目)

■「しかしそれだけではない。 加藤周一幽霊と語る」映画上映と対談

【会 場】立命館大学衣笠キャンパス 以学館2号教室
【日 時】2010年12月4日(土)13：30～16：40
【対 談】

桜井 均氏 本映画制作プロデューサー
立命館大学映像学部客員教授
安斎育郎氏 国際平和ミュージアム名誉館長

日本を代表する評論家であり、立命館大学国際平和ミュージアム初代館長を務められた加藤周一さん(2008年12月5日逝去)が残されたメッセージを、私たちが考える契機としようという企画です。

最初に、1943(昭和18)年10月21日雨中の神宮外

苑競技場で催された「出陣学徒壮行大会」の公開記録である『学徒出陣』（15分 文部省映画）と加藤周一さんの生前インタビューを綴ったドキュメンタリー映画『しかしそれだけではない。加藤周一―幽霊と語る』（95分）の上映を行いました。

映画上映後、本映画のプロデューサーであり、立命館大学映像学部客員教授である桜井均先生と安斎育郎国際平和ミュージアム名誉館長との対談が行われました。

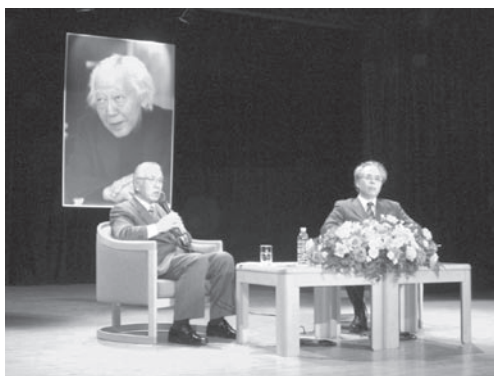
対談は安斎名誉館長の加藤さんとの出会いの思いから始まり、ついで桜井先生が映画撮影時の様子やこの映画のラストシーンの夢幻能のような描写について、エピソードを交えて紹介しました。

そこから、加藤さんは「今と昔」、「若者と老人」、「生きているものと死んでいるもの」など、まるで対極にあるように思われるもののなかに、普遍的なものを見出したこと、それらの普遍的なものから、状況やこと他者に流されない思考をもちえたことが加藤さんの加藤さんたる所以であることなどがお二人によって語られました。

最後に、安斎名誉館長が延坪島（ヨンピョンド）の事件の報道にもふれながら、自由が抑圧されていることの本質を明らかにして意識化していくことが私たちの次の行動につながることを、平和が戦争によって損なわれてきた時代を生き抜いてきた加藤さんの生き様からメッセージを受け取らなければならないことなどがまとめとして述べられました。

会場には10代から70代まで幅広い年齢層の120名余りの来場があり、熱心に耳を傾けていました。

また2014年に本学図書館で「加藤周一文庫」が開設される予定であることから、「加藤周一先生の生涯と著作」展が、衣笠では12月10日（金）まで図書館で、BKCでは12月17日（金）までメディアライブラリーで開催されました。



対談をする桜井先生（右）と安斎名誉館長（左）
パネル写真 加藤周一氏

■展示「わだつみ 不戦の誓い」展

【会 期】2010年11月27日（土）～12月18日（土）

【会 場】立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

今展では、立命館大学を含む学徒出陣、戦没学徒の

手記『きけわだつみのこえ』出版、戦没学生記念像「わだつみ像」の建立、その後の歴史について、この像の制作にいたった「わだつみ像縁起」（中村克郎氏自筆）をはじめとした貴重な資料を所蔵する「わだつみ平和文庫」（甲州市塩山）から提供された資料や、立命館百年史編纂室および国際平和ミュージアムが所蔵する資料を展示しました。「わだつみ平和文庫」の借用資料については、同時期に開催したミュージアムの特別展「ピース☆コレクション」の中でも、学徒出陣によって命を落とした中村徳郎氏の遺した資料「日本戦没学徒の手記」「最後の手紙」などを展示し、小中学生はじめ多くの方々に見学いただきました。ロビーでは、UTYテレビ山梨制作の「わだつみの声よ永遠に～受け継がれる平和への思い」を上映しました。

12月8日行われた不戦のつどいの参加者の中にも、終了後に展示をじっくり参観する姿がみられました。



ミュージアム1階ロビーでの展示の様子

■その他の企画

わだつみ像が建立された翌年の1954年から毎年欠かさず開催されている「不戦のつどい」が57回目を迎え、12月6日BKCで嵐の中の母子像前集회가、12月8日衣笠でわだつみ像前集회가開かれ、それぞれのキャンパスで参加者たちが、「不戦の誓い」を新たにしました。

また今回は、不戦のつどい実行委員会参加団体「全学自治会平和委員会」の学生らにより、PEACE CAMP「学生の『平和と民主主義』～立命館大学から「現代の平和」への発信」（12月7日～12日）が開催されました。アフガニスタンをフィールドに活躍するフォトジャーナリスト久保田弘信氏の写真展や講演会、学内の専門家を講師にした公開プレゼンテーションなど、積極的に自ら若者が考え、行動する取り組みが行われました。

今後とも国際平和ミュージアムは、これらの取り組みを通して、この「わだつみ像」に込められた思いを、世代を越えた社会的記憶として伝え、平和を創造するために役立てていきたいと考えています。

2010年長崎青少年ピースボランティアとの平和交流を行いました

2010年12月12日(土)～13日(日)に、長崎青少年ピースボランティアの9名(高校生8名・大学生1名)が、国際平和ミュージアムで立命館大学・立命館アジア太平洋大学の学生と平和学習・交流を行いました。

5回目の実施となった今回は、立命館大学の学生・大学院生3名、立命館アジア太平洋大学の学生31名、職員を合わせて、全体で51名の参加となりました。

今回、12/11(金)～12/13(日)のスケジュールで大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学(APU)の学生が京都での平和学習・学生交流プログラムに参加していたことから、13日(日)の平和交流会にも参加をすることとしました。APUからの参加学生は、日本人学生のほか、8カ国(インドネシア、韓国、カンボジア、中国、ベトナム、ネパール、ミャンマー、モンゴル)の学生で構成されており、この交流会は、長崎で学ぶ生徒・大学生、京都で学ぶ大学生、別府で学ぶ大学生とが、日本語を共通言語として「平和とは何か」について、まさしく国際的に考え学び交流する場となりました。

安斎名誉館長による講義では、
①「戦争」がなければ「平和」か？
②「暴力」とは何か？③最大の直接的暴力としての戦争、④平和創造の主体形成—自分に何ができるか—という視点について学びました。「無力」と「微力」の間、すなわち、私たち一人ひとりの力は、「微力」



長崎青少年ピースボランティアの生徒たちによる活動紹介の様子

であっても、決して「無力」ではないことを強く訴えかけるものでした。

今回の平和交流会を通して、互いに学び、直接対話をし、コミュニケーションをとることが、お互いが理解し、分かり合えることだと実感することが出来たようです。

＜プログラム＞

〔一日目〕

- ・ミュージアム見学
ボランティアガイド、学生ガイドの案内で、ミュージアムの展示を見学

〔二日目〕

- ・長崎青少年ピースボランティアの生徒たちによる活動紹介
- ・平和講義
講 師：安斎育郎名誉館長
テーマ：「平和」とは何か
—現代平和学における平和概念の発展—

- ・平和交流会
長崎の高校生・大学生と立命館大学、立命館アジア太平洋大学の学生との平和学習・交流会



安斎育郎名誉館長の平和講義の様子



平和交流会の様子

『ひとからひとへ 手から手へ—市民の草の根貿易の取り組みについて—』 NGOワークショップ開催

—サービスラーニングの学生受け入れを通して—

開催日時：12月18日(土) 10:00～12:00

講 師：株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
広報チーフ 小林和夫氏

場 所：立命館大学衣笠キャンパス アカデメイア立命21
3階会議室

対 象：大学生、大学院生

参 加 者：14名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

企 画：国際関係学部 君島東彦教授担当科目

特殊講義I(RE)『平和学』受講生

国際関係学部2回生 平松万寿さん、椎名知里さん
4回生 横内光さん

後期の学生も前期に引き続き、国際平和ミュージアム常設展示室「平和をもとめて」第2展示室NGOの部屋の活性化に取り組むこととなりました。国際関係学部君島先生担当の「特殊講義I(RE)『平和学』」科目の受講生で「サービスラーニング」を選択した受講生が、定期試験に替えて20時間以上の活動をし、ワークショップの企画準備、運営実施と、第2展示室の改善(案)をまとめるというものです。

10月に君島先生と受講生が集まり、ワークショップの日時を決定し、それに沿った活動の計画をすることから始まりました。前期の活動を引き継ぎながらも、ミュージアムに展示してある12のNGO団体の活動をしらべ、各自が興味・関心のある団体について意見交換をする中で、依頼する団体を決定しました。

依頼する団体が確定した後、講師派遣の依頼文書作成、先方への電話、FAXによる連絡など、とにかく初めて行うことばかりで大変だったようですが、幸い講師からの承諾

を得ることができました。

そこからはワークショップ開催日に向かって講師との事前打ち合わせや、会場設営のシミュレーションなどと並行して、多くの学生に参加を促すため、ちらし作成、印刷、配布といった広報活動に取り組みました。友人・知人をはじめ、ミュージアム関係者の担当授業等でのちらし配布、学生が多く集まる食堂での広報などを展開し、それまであまり接点がなかった学生同士の協力は、困難な面もあったようですが、やり遂げました。

ワークショップでは、①講師紹介、②カードゲームを使用した、ブランテーションバナナとATJが取り扱うブランゴンバナナの比較、③ATJ民衆交易の概要、④フェアトレード運動の現状と課題、⑤質疑応答、という内容で、学生が主体となって進めました。ブランゴンバナナ同様に、ATJが取り扱う東ティモールのコーヒーを味わいながら、参加学生たちは、ATJの民衆交易がめざす「農と食」について理解を深めたようで、ワークショップ終了後も講師を囲み熱心に質問する姿が見られました。

なお、第2展示室の改善については、今後ミュージアムにてまとめて進めていくこととなります。



マジカルバナナカードを前に意見を出し合う参加者



学生が進行役を務めます

職場体験受け入れ「生き方探求・チャレンジ体験」 京都市立太秦中学校2年生3名を受け入れました

2010年11月9日(火)～12日(金)までの4日間、京都市立太秦中学校2年生3名が「生き方探求・チャレンジ体験」(京都市立中学校で実施する「生きる力」を身につける社会体験活動)を行いました。

今回の活動では、博物館の仕事を理解する、ということを目指し、初日の火曜日は、高杉館長の講話、岸本学芸員の解説と、特別展「ピース☆コレクション」の見学、ボランティアガイドに同行して常設展示を見学しました。また、大学生スタッフと一緒に近隣へのちらし配布や、大学生協食堂へ広報用の三角柱を設置する体験をしました。2日目からは、地階・2階・特別展の各受付で、開館準備と受付業務を体験しました。

3日目・4日目は、各階での受付業務に加えて、司書や学芸員の仕事を体験しました。3日目のメディア資料室での書架の整理では、請求記号の見方や図書の配列について学びました。4日目は貸出パネルの整理をし、資料の保管について学びました。

最終日はミュージアムの職員とともに、4日間のチャ

レンジ体験を振り返り、それぞれ学んだこと・感じたことを話し合っまとめました。

後日、体験した3名からは、人と人とのコミュニケーションが大切であること、どんな小さな仕事でも意味があるということ、笑顔で元気にあいさつすることが大事であることなどを強く感じたとの感想が届けられました。今回の体験で国際平和ミュージアムの仕事を理解するだけでなく、ひとつひとつの仕事の大切さに気づいてもらったことを嬉しく思います。是非、今後の自分達の活動に活かして欲しいと考えます。



京都市立太秦中学校生徒の皆さん

2009年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2009年度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。
お名前を記し、感謝の意を表します(敬称略・50音順)。

資料

ANDREA TENNANT
今村 光政
大西 英一
岡山 一
治部 康利
小原 輝三

兼清 順子
狩野 栄三
亀井 和子
観音寺婦人会・奥村一枝
佐藤 益弘
島影 美鈴

高折 晃史
高橋 孝三
寺内 邦夫
土橋 賢治
成田須美子
西岡 成幸

野里 真子
服部 素
濱口 正幸
廣瀬平四郎
布川 庸子
藤井 葉子

藤田 道代
村尾 富
森川 演夫

図書

青柳 敦子
赤澤 史朗
浅川 和也
安斎 育郎
飯田 勇
池田 鍊二
一戸富士雄
井上 庚
今地千鶴子

岡本 忍
岡野 正
おざわゆき
桂 良太郎
神原喜久恵
木村 雅英
桐畑 米蔵
黒岩 晴子
佐藤 益弘

穴戸 和子
島田 充子 (YWCA)
杉浦 公昭
鈴木 常勝
高木 敏子
田辺 敏亮
津田 壮章
寺内 邦夫
橋本 貞江

原 圭治
人見ジュン子
福島 在行
藤井 葉子
藤岡 惇
藤原立子・近藤光子
松井 秀夫
溝口 宏
村尾 孝

森田 康夫
山辺 昌彦
湯川 益生
横井久美子
横井 靖男
横尾 広光
吉田 祐子

団体 174団体

平和教育の発信拠点

ー立命館附属校平和教育連続展示ー

国際平和ミュージアム運営委員

一貫教育部副部長 楠井 啓之

10月17日～12月23日にかけて、立命館附属校平和教育連続展示を実施しました。この企画は2007年度に始まり、今回で第4回となりました。立命館には4つの中学校・高等学校、1つの小学校があります。そこで行われている平和教育の成果と生徒たちのメッセージを公開することができました。日本中どの学校においても、何らかの形で平和教育が行われていることでしょう。立命館附属校のその特徴の一つは、生徒たちが考えたこと・主張したいことを、この展示を通して世の中へ発信することにあります。その発信拠点が国際平和ミュージアムなのです。

「平和＝戦争のないこと」と多くの児童・生徒たちが考えています。「だから、今の私たちの生活は平和であり、その状態が続けばいいのだ」という発想を彼らは持っています。「本当にそうなの？」という疑問を投げかけたり、平和な状態を築くに至る過程を調べる機会を提供したりしなければ、彼らは平和について考えることはあまりないでしょう。立命館の附属校ではそのような教育実践が多数行われています。校外学習や宿泊学習・研修と関連付けたもの、社会科の学習と関連付けたもの、メッセージを作品制作に込めるものなど、実施形態は様々ですが、各校が凝らした工夫が展示に垣間見られました。

校外学習や宿泊学習・研修を通しての活動の成果としては、立命館慶祥高等学校1年生が広島・長崎を訪れ、そこで考えた平和宣言や、立命館守山中学校2年生が広島を訪れて「平和の鐘」を合唱する様子を映し出すVTR上映などがありました。また、立命館中学校・高等学校のベトナム・カンボジアボランティア体験学習報告、立命館宇治高等学校3年生が行った世界各地での憲法第9条や原爆投下などについての聞き取り学習の報告など、国際社会で活躍できる力をつけることを教育コンセプトの一

つとしてあげている立命館附属校ならではの取り組みも見られました。

社会科の学習との関連では、立命館高等学校の「戦前の大陸戦略を考える」（1年日本史）、「一五年戦争についての研究」（2年世界史）などに見られる歴史学習のほか、立命館宇治中学校の「世界の国々 様々な問題」（1年）のように地理学習の一環としての展示もありました。



平和ポスター（立命館小学校）

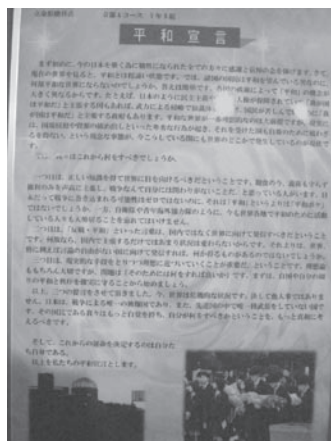
平和への願いやメッセージを含めた様々な制作物も展示されました。立命館小学校児童による「平和ボスター」、立命館慶祥中学校2年生による「平和のもの

考えたタワー」など、授業内で行われたもののほか、立命館守山中学校生徒による募金で集めたコインアートを文化祭で展示し、そのお金をアジア諸国で井戸を掘る活動に寄付する、という取り組みも紹介されました。

その他、平和をテーマに作成した立命館小学校児童による新聞、水や食糧問題を扱った立命館守山高等学校3年生による「国際貢献プレゼンテーション」、立命館宇治高等学校生徒による「反貧困ポスター」など数々の視覚に訴える展示がありました。

今回の展示期間中に、多数の来館者の皆様にアンケートの記入をしていただき、貴重なご意見・ご感想を頂戴しました。児童・生徒たちが発信したメッセージに対して、このようなフィードバックをいただけることが、「やってよかった」という充実感につながり、さらに平和に対する考えを深めるきっかけとなることでしょう。

立命館の教学理念は「平和と民主主義」です。一貫教育の中で、そのアイデンティティをしっかりと持ち、考え、発言し、行動できる児童・生徒たちが育っていかれることを強く願っています。



広島や長崎で考えた平和宣言
（立命館慶祥高等学校）

常設展示見学者の感想 (2010年10月～2011年1月)

自然破壊、戦争の怖さがよくわかりました。

女性 中学生 宮崎県

せんそうについてよくわかった。せんそうはいやなものだなと思いました。

男性 小学生 滋賀県

わたしたちがふだん知らなかったことがたくさんあったことに、ものすごく興味をもちました。

女性 小学生 兵庫県

今日、ミュージアムを見学させていただいて、日本は本当に幸せだなと思った。世界には、私達のように勉強できない子がたくさんいるっていうのを考えると、平和って何だろうとか、平和にできるのかという事を考えます。そして、世の中を少しでも平和に近づけようというのを行動で表していきたいです。皆が笑顔になる世界にしたいです。

女性 小学生 兵庫県

とてもいい勉強になって良かったです。また、ゆっくりと見にこられたらと思います。ありがとうございました。

女性 小学生 京都府

戦争をみぢかにかんじた。私ができることってなに！？って思った。PEACE

小学生 兵庫県

もう二度と戦争が起こらないでほしいです。あと、人間にひがいのある物は、作らないでほしいです。

男性 小学生 和歌山県

ガイドの人の説明がとてもよかった。

男性 中学生 奈良県

昔の苦しみがよく分かりました。今の時代の私たちはとても幸福だと思いました。私たちの知らないところはとてもおそろしいことがあると思いますが、まわりの人たちが私たちのように平和になったらいいと思いました。

女性 中学生 滋賀県

私たちは経験していない戦争の恐ろしさが身にしみて分かった。二度と、恐ろしい戦争がおこってほしくない。

女性 高校生 京都府

反戦平和とは世界人類共通の悲願です。母校立命館がその一躍を担っていることを誇りに思います。私も微力ながら頑張る気持ちにさせられました。

男性 60代 高知県

戦争のことがよく分かりました。犠牲となった人のことをよく知ることができて、とても思うことができました。

女性 高校生 京都府

スタッフの方々の説明やお話しがどの展示品よりも説得力があり、すごく心を打たれました。これからは、戦争の内面や、当時の人々の苦しみなど、現代の私達が知っていかなければならないし、昔、日本がしてきたあやまちを、しっかり謝罪していかなければならないと思いました。

女性 高校生 神奈川県

考えさせられました。私にできることはなんなのか、いつも悩んでいるのですが、今日スタッフの人にベトナム戦争のことを詳しく説明してもらって、私も大人になったときに子供たちに戦争の悲惨さとかを伝えられたらいいなと思います。

女性 高校生 神奈川県

子どもに、一緒に行こうと誘ってもらい来館しました。このような施設があることを、誇りに思います。末永い存続を願っております。ありがとうございました。

女性 40代 京都府

受付の方、ガイドの方が親切でよかった。また来たいです。1日では足りません。

30代 東京都

すごく平和について分かりました。どれもリアルすぎて怖かったです。でも、すごくいい所にこられました。ありがとうございました！

女性 中学生 三重県

2010年4月
～2011年1月

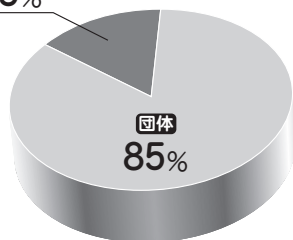
入館者状況

◎開館日数

243日

<有料団体・個人入館者状況>

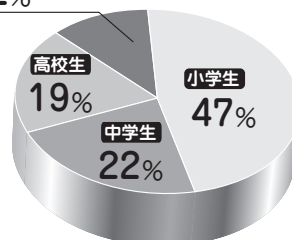
個人 15%



◎オープン後常設展入館者数累計 740,003名

<有料団体入館者数状況>

一般 12%



2010年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	人数計 (名)
総入館者数		3,630	3,677	5,868	2,877	3,007	2,188	12,013	9,527	4,562	1,247	48,596
特別展	夏季特別展 『カレル・チャペックの世界』	(6/15～7/31)										4,336
	秋季特別展 『世界報道写真展2010 —WORLD PRESS PHOTO 2010—』	合計 (3会場)										12,882
	京 都 (立命館大学衣笠キャンパス)	(9/22～10/16)										7,974
	大 分 (立命館アジア太平洋大学)	(10/19～11/7)										2,329
	滋 賀 (立命館びわこ・くさつキャンパス)	(11/10～11/23)										2,579
冬季特別展 『ピース☆コレクション—資料でつづる平和ミュージアムの軌跡—』		(10/26～12/18)										15,478
小 計												32,696
講演会 ほか	第2回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)	(4/22)										141
	フォルカー・シュタンツェル氏 (駐日ドイツ大使) 『ドイツにおける紛争解決と平和構築』	(5/29)										600
	第3回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 明学館94号教室)	(5/29～6/12)										626
	伊波洋一氏 『宜野湾市長として、米軍再編と私たちの暮らしを振り返る』	(6/13)										37
	パネル展「平和・文化・スポーツ創造に翔ばたく立命館人」 (国際平和ミュージアム 中野記念ホール)	(6/16)										140
	戦没画学生「戦場からの絵葉書」展 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(7/3)										42
	対談 窪島誠一郎氏 (無言館館主) × 高杉巴彦館長 『戦場からの絵葉書によせて』	(7/22)										415
	第4回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 研心館632号教室)	(7/22)										70
	ラン・ツウィゲンバーグ氏 (国際交流基金研究者) 『記憶と戦争：イスラエルと日本における戦後史比較』	(6日間・7/28～7/30、8/18～8/20)										117
	カレル・チャペックの世界 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(10/5)										215
	公開記念講演会 川村貞夫教授 (立命館大学理工学部ロボティクス学科) 『ロボットの科学と技術』	(11/16)										252
	夏休み親子特別企画2010『ロボットの実演・出前授業』 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(10/15)										90
	マンドリン ミニコンサート (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(11/20)										37
	ランゲンドルフマンドリンオーケストラ (ドイツ)、立命館大学マンドリンクラブ	(11/23)										92
	下見学会	(11/28)										118
	世界報道写真展2010 —WORLD PRESS PHOTO 2010—	(12/4)										121
	公開記念講演会 國森康弘氏 (フォトジャーナリスト) 『世界の紛争と貧困を撮る』 (衣笠キャンパス 以学館6号教室)	(12/11)										482
	公開記念講演会 森住卓氏 (フォトジャーナリスト) 『戦争は続いている～イラクの戦後と沖縄基地問題～』											
	(びわこ・くさつキャンパス コーニングハウスI 304号教室)											
	映画上映会「ひろしま」 (衣笠キャンパス 以学館2号ホール)											
	ピース☆コレクション 公開記念講演会『どう使う？平和ミュージアム』 (国際平和ミュージアム 2階会議室)											
	角田将士准教授 (立命館大学産業社会学部)、高松智行教諭 (横浜国立大学附属鎌倉小学校美術教育)											
	Mustafa Said レクチャーコンサート 国境を越えて平和に捧げる (国際平和ミュージアム 1階ロビー)											
	立命館創始140年・学園創立110周年記念 公開講演会 (衣笠キャンパス 以学館2号ホール)											
	『わだつみ不戦の誓い』鼎談 中村はるね氏 (産婦人科医師) × 東ちづる氏 (女優) × 安斎育郎名誉館長											
	映画上映「しかしそれだけではない 加藤周一幽霊と語る」と対談 桜井均氏 (映像学部客員教授) × 安斎育郎名誉館長											
	立命館創始140年・学園創立110周年記念・APU開学10周年記念											
	アジア太平洋学長平和フォーラム (衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)											
小 計												3,595

年末から年始にかけて寒い日が続きましたが、秋から初冬にかけての当ミュージアムは「わだつみ像」生誕60周年記念展示や鼎談、アジア・太平洋学長平和フォーラムなど立命館創始140周年・学園創立110周年記念行事が目白押しで、スタッフ一同熱い日々を過ごしました。まずはご尽力・ご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

特に学長記念フォーラムは直前まで準備に気が抜けず、また当日かみ合った論議ができるのかという一抹の不安もありましたが、壇上で報告した学生諸君の報告はそうした事前の不安を見事に打ち消してくれました。まだ20代前半の学生諸君が、こうした国際的な場で気後れせず、堂々とプレゼンテーションをしている姿を見ると、引きこもりの独居老人のような精神状態で日々を過ごしている私など、隔世の感を抱かざるを得ませんでした。

私の鈍磨しつつある感覚をもってしても、国境を越えた平和への熱い思いは鮮烈に伝わってきました。もちろんその求める平和の内容とそこに近づく道筋には、簡単には埋めがたい懸隔や溝があるのは事実です。特に国家という回路を通したとき、この問題はより重たい課題としてわれわれにのしかかって来ることは、しばしば報道される国益をめぐる熾烈な対立を見れば否応なく思い知らされます。

しかし、その障壁は簡単に除去できないにせよ、一人一人の平和への思いが確たる事実であるかぎり、どちらによりリアリティーがあるかは自ずと明らかです。その思いを相互に信じて国益に翻弄されないつなぎを作ることは、あながち絵空事ではないかも知れません。

小関素明

※ 本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

2011年度特別展

●「世界187の顔ー生命の現場からー」^{いのち}

会 期：2011年5月17日(火)～7月10日(日)
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：日本ビジュアル・ジャーナリスト協会(JVJA)
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会
京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社
京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社

日本ビジュアル・ジャーナリスト協会(JVJA)が所有する戦場や飢餓、被災地や環境破壊など様々な現場の写真パネル「世界187の顔」約130枚に映る様々な「顔」を通して、現在世界のどこかでおきている紛争や環境破壊、貧困、自然災害などの状況を写真で伝え、来館者にいま一度平和を見つめ、平和とは何かを考えるきっかけになることを願い、特別展として開催いたします。



「ここが私の家のリビングだったの」
大津波の被害で家も家族も失った。
インドネシア 2005年
(野田雅也 JVJA 提供)

●「世界報道写真展2011」

－WORLD PRESS PHOTO 2011－

開催日程は変更する場合があります。

京都会場 会 期：9月21日(水)～10月16日(日)
(立命館大学国際平和ミュージアム)
滋賀会場 会 期：10月18日(火)～11月3日(木)
(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)
大分会場 会 期：11月6日(日)～11月20日(日)
(立命館アジア太平洋大学)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品(約200点)で構成した写真展で、今年で54回目を迎えます。

いま、この地球上で起こっている世界の様々な側面を、写真を通して来場者の方に知っていただくことで、社会のあり方とは、平和とは何かについて、思いをめぐらせていただく機会となるべく開催するものです。

今年度も世界100カ所を巡回、展示に足を運ぶ人は全世界で数百万人になると予想されています。



〔世界報道写真大賞〕
ジョディ・ビーバー (南アフリカ/2010)
逃亡の罪でタリバーンに刑を宣告され、夫に
耳と鼻を削ぎ落とされたアフガニスタンの女性

2011年度展示

●「ベルタ・フォン・ズットナー展」

会 期：8月10日(水)～28日(日)

ノーベル賞は、ダイナマイトの発明として知られるスウェーデンのアルフレッド・ノーベルの名に由来します。彼は、43歳の時、伴侶を見つけようと「家政婦兼秘書」を5ヶ国語で公募しました。驚いたことに、5ヶ国語で応募した女性がいました。それこそベルタ・フォン・ズットナーその人です。ベルタはノーベルの秘書となりましたが、平和問題に熱意をもち、1889年、有名な『武器を捨てよ!』という小説を書きました。ベルタの平和への熱意は、ノーベルが「平和賞」を設定する源になったと言われます。ベルタは、1905年、女性初のノーベル平和賞受賞者となりました。



ベルタ・フォン・ズットナー (画：安斎育郎)

関連企画

8月20日(土)講演会

演題：「平和のために婦人参政権を唱えたベルタ・フォン・ズットナーの生涯」(仮)

講師：ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン (ブラッドフォード大学、イギリス)

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展

《開催予定》

●ジャック・サル展—De/Portees 強制収容—

会 期：2011年4月15日(金)～5月4日(水)

主 催：イタリア文化会館

●写真展 WORLD CHILDREN PHOTO PROJECT

会 期：2011年6月10日(金)～6月30日(木)

主 催：庄司博彦(フジ写真事務所)

●第5回立命館附属校平和教育実践展示

会 期：2011年10月～1月

●第17回ミュージアムロード参加企画

会 期：2月5日(日)～3月25日(日)



カール・フロールシュ君
([「写真展 WORLD CHILDREN
PHOTO PROJECT」])

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2011

月 日：2011年7月22日(金)・30日(土)

今年で6度目となる企画。平和について、戦争について、世界で今起きていることについて、わかりやすく学び、平和について親子で考えていただく機会となりますよう、開催いたします。

下見見学会

月 日：2011年7月26日(火)・27日(水)

8月18日(木)・19日(金)・23日(火)・24日(水)

夏休みに小学校・中学校の先生方を対象とした下見見学会(無料)を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、郊外学習、地域探検等様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和講義体験、ボランティアガイド解説つき見学、個別相談会を行います。



2010年夏休み親子特別企画の様子

「平和ってなに色?」一字で表す平和のメッセージ

会 期：2011年10月27日(木)～11月3日(木)

2005年文字・活字文化振興会により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。



2010年小中学校教員対象下見見学会の様子

「映画上映会」

2003年から恒例となったこの企画は、「平和」をテーマとした映画上映と、国際平和ミュージアムの館長等が映画の制作に関わった監督や関係者から、その思いを直接聴く機会を作るといった対談を組み合わせるものです。前期・後期各1回の上映を予定しています。



映画「ひろしま」上映会作品紹介の様子

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第18巻第3号(通巻52号) 2011年3月10日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>